

(採択された実験の進捗報告)

MSTID 発生時における電離圏 E-F 領域の 電子密度鉛直・水平構造観測

芦原 佑樹 (奈良高専)、山本 衛 (京大)、石坂 圭吾 (富山県大)
熊本 篤志 (東北大)、白澤 秀剛 (東海大)、頭師 孝拓 (奈良高専)

概 要

中規模伝搬性電離圏擾乱 (Middle-Scale Traveling Ionospheric Disturbance: MSTID) は、夏季夜間や冬季昼間に多く見られる電子密度の波状構造である。MSTID の波長は 200km 程度で、電離圏 F 領域で発生する。MSTID の最も有力な成因として F 領域における Perkins 不安定があげられるが、その成長率は非常に小さいため、その成長率は非常に小さいため、全てを説明するには不十分であるとされる。これを補う機構として、夏季夜間においてはスポラディック E (Es) 層の不均一構造に起因する分極電場が磁力線に沿って F 領域に投影されることで、MSTID の成長率が急激に加速されることが提唱されている。また、冬季昼間においては下層大気から E 領域を通して F 領域に伝搬する大気重力波と呼ばれる中性大気の横波が原因と考えられている。このように MSTID の生成には、夏季夜間・冬季昼間のいずれの場合においても、E 領域および F 領域で同時に電子密度の鉛直・水平構造を同時に観測することが生成機構解明に重要である。

本実験では、中規模伝搬性電離圏擾乱 (MSTID) 発生時における電離圏 E 領域と F 領域の電子密度鉛直・水平構造をそれぞれトモグラフィ解析により推定する。これにより、中緯度における MSTID の生成機構を解明することを観測目的とする。

(1) 研究の背景、実験目的

① 研究の背景

中規模伝搬性電離圏擾乱 (MSTID) とは、電離圏 F 領域に発生する波長 200km 程度の波状構造が日本の上空において夏季夜間には南西方向に、冬季昼間には南南東方向に伝搬する現象である。夏季夜間においては、従来大気重力波による中性大気の摂動が原因とされてきたが、中緯度においては電場が重要な役割を果たすと考えられている。最も有力な成因として F 領域における Perkins 不安定があげられるが、その成長率は非常に小さいため、全てを説明するには不十分であるとされる。Perkins 不安定の成長率を補う機構として、地球磁場により結合された E 領域との相互作用が提唱されている。横山ら[1]の計算機シミュレーションからは、スポラディック E (Es) 層の不均一構造に起因する分極電場が磁力線に沿って F 領域に投影されることで、MSTID の成長率が急激に加速することがわかってきた。また、冬季昼間においては下層大気から E 領域を通して F 領域に伝搬する大気重力波と呼ばれる中性大気の横波が原因と考えられている。しかし、E 領域よりも上空では、大気重力波は粘性による消散の効果を大きく受ける。このため F 領域において MSTID の原因となる大気重力波は、下層大気から直接伝搬したものか、または伝搬過程

において消散し二次的に生成されたものであるという二つの可能性が考えられる[2]。実際にどちらの大気重力波が MSTID の成因であるかを決定するためには、E、F 両領域において大気重力波の鉛直・水平構造を明らかにする必要がある。このように MSTID の生成には、夏季夜間・冬季昼間のいずれの場合においても、E 領域および F 領域で同時に電子密度の鉛直・水平構造を同時に観測することが生成機構解明に重要である。

本実験では、中規模伝搬性電離圏擾乱 (MSTID) 発生時における電離圏 E 領域と F 領域の電子密度鉛直・水平構造をそれぞれトモグラフィ解析により推定する。これにより、中緯度における MSTID の生成機構を解明することを観測目的とする。

② 実験目的

① 科学的重要性・学術的意義

研究背景で述べたように、MSTID 生成機構の解明には、電離圏空間構造を観測することが必要となる。電離圏空間構造を観測するためにロケット GNSS-TEC 観測器を新規開発し、ロケット飛翔軌道の上側となる電離圏 F 領域の電子密度トモグラフィ観測を行う。また、2 周波数ビーコンではロケット飛翔軌道の下側となる電離圏 F 領域の電子密度トモグラフィ観測を行う。電場観測では、2 対のプローブを展開して、プラズマ運動に影響を与える電場の大きさ・方向を観測する。インピーダンスプローブでは電子密度のその場観測を行い、トモグラフィ解析領域端点の電子密度情報とする。また、太陽・地平センサは画像情報から太陽および地平線の情報を画像処理により求めることで、ロケットの姿勢を決定する。

② 人材育成

科学的な実験目的に加えて、観測ロケット実験が持つ『実践的な宇宙人材育成の場』としての役割についてもより強力で推進する。これまでの多くの電離圏観測実験では、FM の詳細設計・製造工程をメーカーに発注し、短期間で信頼性の高い観測機器を入手するやり方をとっている。これは、研究推進の観点から見ると合理的である。一方で、大学・高専が担う教育機関としての役割からすると、各 PI 機器を担当する学生が FM 品の性能・環境試験やデータ解析だけでなく、FM 設計や製造を含めて担当することができれば、極めて質の高い実践的な教育効果が期待できる。近年は、小型の 3D プリンタや CNC フライス盤を使ったテクノロジー系 DIY 環境が目まぐるしく進歩している。3D プリンタでの造作物を観測ロケットに直ちに搭載できるわけではないが、小ロット製造の環境は従来よりも格段に整いつつある。本実験に搭載する PI 機器は、極力メーカー支援を受けずに大学・高専での内製化を図る。これにより、学生のものづくり実践力を養成する。また、各種噛み合せ試験を通してシステムインテグレーションの方法、トラブルシューティングのやり方、プロジェクトの運営方法を学習する。さらに、内之浦での最終確認作業や打ち上げオペレーションを通して、宇宙人材に必要となる実践力と経験値を習得する。この人材育成プログラムの実施については、文科省 宇宙航空科学技術推進委託費「観測ロケット実験を通じた宇宙機器エンジニアリングスキル養成プログラム (事業期間 2019 年 9 月～2022 年 3 月)」の支援を受ける予定である。

(2) 実験方法

搭載予定の観測機器を表 1 に示す。

表 1. 搭載する観測機器

観測機器 (略称)	担当者 (所属)
ロケット GNSS-TEC 観測	芦原 佑樹 (奈良高専)
2 周波数ビーコン観測	山本 衛 (京大)
電場観測 (EFD)	石坂 圭吾 (富山県大)
インピーダンスプローブ (NEI)	熊本 篤志 (東北大)
太陽・地平センサ (SAS・HOS)	白澤 秀剛 (東海大)

ロケット GNSS-TEC 観測 (TEC : Total Electron Content)

GNSS 衛星からは、L1 (1.57542 GHz) と L2 (1.22760 GHz) の 2 つの周波数の電波が送信されている。電離圏プラズマは分散性媒質であるため、屈折率が周波数に依存する。そのため、2 つの電波の伝搬経路に差異ができ、地上の GPS 受信機への到達時間に差が生じる。この時間差を逆算することで、電波伝搬経路上 (1 次元) の総電子数を求める手法を GNSS-TEC 法という。一方、トモグラフィ法とは、直線経路 (1 次元) の電波透過量や吸収量を多方向から測定し、得られたデータをマトリックス演算することで、2 次元像を構築する手法である。

2 周波数ビーコン観測 (DBB : Dual-Band Beacon)

ロケット搭載のビーコン送信機から 2 周波数 (150MHz と 400MHz) の電波 (出力 1W) を送信し、複数拠点に設置する地上受信機で 2 周波数間の位相差を測定する。信号間の位相差の解析から伝搬経路上の全電子数を測定する。

電場観測 (MFR : Medium Frequency Receiver)

2 対のプローブを展開し、電離圏中の空間電場の大きさおよび向きを測定する。

インピーダンスプローブ (NEI : Number density of Electrons by using Impedance probe)

プラズマ中に展開した 1.2 cm 径、1.2m リボンアンテナ(Be-Cu)のインピーダンスの周波数特性を計測することによって、高域混成共鳴(UHR)周波数を決定し、ロケットの軌道に沿った電子密度プロファイルを高精度で導出する。

医療用の X 線 CT のように全周測定データがそろったトモグラフィではあまり問題とならないが、ロケット GNSS-TEC トモグラフィのように投影角度が制限される場合には解析領域の端点 (ロケット軌道) の電子密度を直接計測することで、トモグラフィ解析精度の向上が期待できる。

太陽・地平センサ (SAS・HOS : Sun Attitude Sensor ・ Horizon Sensor)

全天球センサを用いて、太陽角度と地平線角度を測定する。これにより、観測ロケットの絶対姿勢を測定する。

(3) スケジュール

本実験は S-520 を用いて、極超音速統合飛行制御実験 (HIMICO) と相乗り実験の形で、2021 年度の実験として計画している。現在、各 PI 機器の設計を進めており、2020 年度内に内製による製作を完了し、2021 年度の打ち上げ予定である。打ち上げ時期は、MSTID の擾乱構造がはっ

きり表れる夏季夜間を希望している。

参考文献

- [1] T. Yokoyama and D. L. Hysell, Geophys. Res. Lett. **37**. L08105(2010)
- [2] Miyoshi, Y., Jin, H., Fujiwara, H., & Shinagawa, H, Numerical study of traveling ionospheric disturbances generated by an upward propagating gravity wave. Journal of Geophysical Research: Space Physics, 123, 2141–2155.
<https://doi.org/10.1002/2017JA025110> (2018)